

広域計画等フォローアップ委員会

第1回「人の環流とアジアのハブ機能」に関する小委員会 議事録

(意見交換部分の抜粋)

日時：平成30年10月4日(木)

10:00～12:00

場所：関西広域連合本部事務局 大会議室

○加藤委員長

「人の環流とアジアのハブ機能」ということで、もう一つの小委員会もありますけれども、そこと並行してということ、いつかの時点で内容的な調整と申しますか、議論をしなければいけないかなと思っておりますが、ともあれ「人の環流とアジアのハブ機能」ということで会議を進めさせていただきたいと思っております。

早速ですけれども御準備いただきました資料につきまして御説明をよろしくお願いたします。

○日裏計画課長

広域連合本部事務局計画課長の日裏でございます。資料を御説明させていただきます。座って御説明させていただきます。

資料につきましてはこの資料1から資料4までをまず一括で簡単に御説明させていただきます。

まず資料1のソフトパワーについてという資料でございますが、この資料につきましては、加藤委員長と事前に打ち合わせをする中で、今までフォローアップ委員会の会議の中でいろいろ御意見をいただいている中に関西が持っている魅力、すなわち文化であるとか、いろいろなアニメーションとか、いろいろなコンテンツといったものによる関西の魅力の発信、そういったことを頑張っていくのがいいのではないかと申す御意見がございました。その考え方については、少し前にはなるんですけども、国がソフトパワーによる経済成長を提言したことがございます。その考え方と非常にび

ったり、似通ってくるのではないかと加藤先生からお話がありましたので、ソフトパワーというものがその当時どういう議論であったのかを御紹介させていただくという事を出していただいたものでございます。

まず1番の定義でございますけども、そもそもソフトパワーとは何かというところを確認したんですけども、そもそもは政治学の用語であるということで、ハーバード大学の政治学のジョセフ・ナイ教授が強制力によるハードパワーに対して、軍事力とか経済力、そういう強制力によるものではなくその国の持っている文化や考え方、政策の魅力といったものに対して支持を得ることにより国際社会の中で信頼や発言力を得ていくことが大事ではないか、そういうことを進めていく力がソフトパワーだということをおっしゃったことが始まりのようでございます。強制や報酬ではなく、魅力によって望む結果を得る能力、これは衆議院事務局がつくった資料から引用しているんですけども、そのように説明されているということでございます。

我が国におきましてはこのソフトパワーにつきまして、平成22年ですけども新成長戦略が国の方針として閣議決定されまして、その中で我が国のファッション、コンテンツ、デザイン、食、伝統、文化、観光といったものが持つソフトパワーを活用し、その魅力と一体となった製品、サービスを世界に提供するクールジャパンの海外展開を国家戦略プロジェクトとして位置づけいたしました。

また、経産省においては産業構造ビジョン2010、これも平成22年当時のビジョンでございますけども、このクールジャパンを全体コンセプトに位置づけて、文化産業の持つソフトパワーを強化すること、文化産業は稼ぐ柱、人材の活躍の場とすることが定められたものでございます。まさにこの辺の考え方が今までのフォローアップ委員会の考え方に非常に似通っているのではないかと思います。

3以降はその当時の産業ビジョン2010の概要をまとめたものでございますが、今申し上げたように、我が国のソフトコンテンツを使って日本の経済を再成長させていくことについてまとめられたものでございます。裏面には施策の方向性などをまと

めてございます。

ただこの考え方は、平成22年当時の考え方ではございますが、安倍政権にかわってから緊急経済対策などが何回もされてますけども、その際の緊急経済対策における閣議決定においても、このソフトパワーを用いた、柱としたクールジャパンの推進はその中でも触れられておりますので、今も我が国において、この考え方についてぶれはないものということでございます。

簡単ではございますが次、資料をできるだけ簡略化して説明させていただきたいと思えます。次に移らせていただきます。

資料2-1につきましては、国際機関との連携を我々、今後やっていかなければならないと考えておりました、第3期広域計画でもそれに触れております。

まず資料2-1、1ページ目でございますけども、現時点で関西広域連合が取り組んでおります国際機関との連携を御紹介させていただいております。

アはJICA関西との連携ということで、国連が提唱しておりますSDGs、17の目標を掲げて取り組んでいこう、持続的な社会を目指すために取り組もうということでやっておりますけども、それを関西において広げていくことを目的としまして、JICA関西が中心となりまして関西SDGsプラットフォームを立ち上げました。関西広域連合はこの中で、JICA関西、それから近畿経済産業局、関西広域連合の3者で事務局になっておりました、また本部事務局長が運営委員として運営にも参画しております。そして関西でのSDGsの普及、啓発に向けて、これは民間企業も相当多数会員として入っていただいております、官民連携で推進する組織でございます、主な取り組みは普及啓発のための各府県でのキャラバンを今、ずっとやっております。それからコア・イベントとしてシンポジウムなども今年度、実施する予定でございます。

それからイは在日米国商工会議所との連携でございます、毎年度ここに書いておりますようなテーマを決めまして、ACCJと意見交換をしております。25年、2

6年と女性活躍についてテーマを設定して意見交換をしておりますが、これなどは29年度から女性活躍の推進について関西広域連合でもフォーラムを立ち上げて、検討に取り組み始めております。こういったことに生かしております。今年度は健康医療をテーマにした意見交換をする予定でございます、関西広域連合では関西健康医療創生会議という、これも産官学連携のプラットフォームを設置しております。これは健康医療文化での新産業の創出を目的としたプラットフォームでございますが、こういった取り組みにも今回のACCJとの意見交換を生かしていきたいと考えております。

それからウはTCIネットワークとの参画ということで、これは産業分野での産業クラスターに関する研究者や実務担当者、それからクラスター組織、国の開発機関、こういったものが構成メンバーとなっておりますグローバルな組織でございます、これに昨年度、関西広域連合は参画いたしました。

TCIネットワークの概要につきましては、資料2-2で簡単にまとめてございます。1番はTCIネットワークの簡単な概要を御紹介させていただいております。それからアジア支部は関西広域連合が加盟している支部でございます、韓国のテグに支部がございます、組織としてはそちらに加盟しております。2番は加入に当たって関西広域連合が目的としている点でございます、広域産業施策の強化ということで海外との連携、シンクタンク機能の強化、これも海外からのいろいろな情報をネットワーク化して取り入れていきたい、交流を図りたいということでございます。それから広域連合のプレゼンスの向上ということで、広域連合としてまた情報発信をしていきたいと考えてございます。裏面の2ページ目は、TCIネットワークが提供しております、こういうことを会員向けに提供していることを御紹介させていただいております。3ページは、機関会員の名簿でございます。少し古い情報ではございますが参考につけさせていただきます。

ちょっと戻っていただきまして資料2-1の、今度は2ページ目をごらんください。2ページ目の2は、関西広域連合の構成府県市が持っております海外事務所の一覧を

つけさせていただいております。独自事務所を持っているもの、海外の機関に人を派遣しているもの、海外の事業者に業務委託をして観光プロモーションや進出した企業への支援、それから観光や企業に係る情報の収集などを業務委託しているものでございます。

(2) は関西に所在している領事館等の一覧でございます。ほとんどが大阪市に所在しているのですが、それぞれの領事館といろいろな意見交換の場やお客が来た場合の調整、友好都市との交流、そういったものについてそれぞれの構成府県市で取り組んでおります。

3 ページは、そのほかの国際機関との連携についてそれぞれの構成府県市の取り組みを挙げさせていただいております。

資料3 でございますけども、これは関西広域連合の広域産業局が作成しております、関西の産業に関して紹介した資料でございます。開いていただきまして、右側に関西経済の特徴やポテンシャル、それからもう一枚めくっていただきまして7 ページ、8 ページには世界有数の知的資源が集積している場所である、研究機関や大学が集積している場所であることを御紹介させていただいております、9 ページ、10 ページには特区の状況、11 ページは関西に集積しております産業クラスターの状況一覧でございます。あとライフイノベーション、グリーン・イノベーションと、関西が今取り組んでいる新たな産業について御紹介させていただいております。これにつきましては英語版も作成しておりまして、ホームページにも掲載し、海外向けの情報発信としても活用しております。

資料4 でございます。これは近畿経済産業局が経済界の関経連、大阪商工会議所、JETRO、こういったところと合同で関西に対して海外の企業を呼び込むためのいろいろなことについて検討されているのですが、その会議が出している資料でございます。「Welcome to 関西」という名前でございますけども、これについても関西の企業の状況とかインフラの状況や、大学・企業の集積などがございます。

資料の19ページをごらんください。関西地域における外国人の受け入れ環境の整備が書かれておりまして、次の20ページ以降は関西の産業構造などがございます。

そして、24ページからは対日投資への関西のサポート体制について紹介しておりまして、25ページ以降は各自治体による取り組みなどが紹介されてございます。この資料につきましても英語版と中国語版が作成されておりまして、海外向けのPR用として活用しているものでございます。

資料については、以上でございます。

○加藤委員長

ありがとうございました。この後、我々の議論の時間ということでよろしいですかね。

○日裏計画課長

はい。今、資料4まで一応御説明させていただきましたので、1のソフトパワーによる国際競争力の強化をここの部分でお願いします。

○加藤委員長

そうしましたら検討項目の1、ソフトパワーによる国際競争力の強化を御説明いただきました。最初に事務局の皆さんと打ち合わせを始めたときにはソフトパワーという言葉をつけてませんでして、その後新たにといいますか、こういう考え方も入れてもいいのではないかとということで、これはとりあえずの提案ですので、こういう考え方を入れるかどうか、皆さんの御意見を伺いながらということです。

御説明いただきましたように、ソフトパワーという言葉そのものは実は政府がもう10年ほど前に国の政策戦略の中で使った言葉です。事務局の皆さんがきちっとその後のフォローをしてくださったんですけども、組織までつくられて政府は動かしていかれたようですが、国が思っていたソフトパワーとしては必ずしもうまくいっていないのが現実のようです。ただ、ソフトパワーという考え方そのものは非常に理にかなっているというか、経済活動との両輪といいますか、という点でも重要な観点を含

んでいると思いますので、このソフトパワーという言葉を使うかどうかは別にして、そういう観点を1つ、入れてはどうかという皆さんへ御提案であります。私自身は経済をやってますけれども、上村さんも経営者としてのお立場があるんですけども、お金だけでは人はどうも動かんと、社会が成熟してくる中で、お金を動かすためにはもう一つの側面を同時に動かしながらということがあるだろうということで、こんなような表現を入れていただきました。

今、御説明いただいたようなところから、今回の人の還流とアジアのハブ機能というところで議論を始めてはどうかということである意味、わかりやすい言葉を引き金にして議論を展開していければいいかなという思いがございます。よろしく願いいたします。

今、事務局からいただきました説明で何か皆さんからお考え、コメント、批判、何でもいいですけど、いただければと思います。ソフトパワーというような観点で関西を見てどうかという、海外との関係、今回もアジアが焦点になっているんですけど大南さん、アメリカでの経験も随分、生活もされていたと思うんですけども、こんなような観点といたしますかね、どうですかね。

○大南副委員長

私が考えるに自分たち自身が神山中、ローカルでずっとやってきているわけですよ。当初行政からの支援も得られない状況の中では、資金面の制約からハードは目指せないわけですよ。必然的に自分たちの思いとかで動かせるのはソフトな部分でしかない形でずっとやってきたので、この考え方自体には非常に賛同するというか、本当にこれから必要なのはこれかなと思います。

アートのプログラムを例に挙げると、行政が主導していくとアート作品とアートウオークを最初から計画的に整備していくみたいなのが結構多いような気がします。最初から絵を描いて、この枠の中に物事をおさめていこうというやり方が結構多いわけですよ。僕らが神山中でやってきたのは、最初からそういうふうに絵を描いて予算

を投下することができないわけだから、まずはある山の中にアーティストを呼んできて作品を置いていくわけですね。ある程度広がりを持ってきたから、じゃあこれをアートウオークでつないでいこうという感じで、全てがソフトを先に構築して、その上にハードを乗っけていく。アートプログラムの立ち上げ時には行政からも結構お手伝いいただいたわけだけども、結果的にアートウオークをつくるときに、今度は行政の出番がやってくるみたいな形の組み立て方が一番物事が健やかに育っていくという気はしますね。

○加藤委員長

表現はともかくとしてまずこういうソフトの領域に、特に広域連合ですので、個々の自治体がされているものとはちょっと違う観点から海外との関係を見ていくのが大事かもわかりませんね。

○大南副委員長

そうだと思います。

○加藤委員長

どうでしょうか、新川委員。

○新川委員

まだイメージが固まり切ってないですが、ソフトパワーというところが関西として力がありそうだと何となくわかるんですが、もう一方ではソフトパワーも結局、今回の関西での構想で言えばお金とか経済振興とかに結びつかないとソフトパワーにならないような、そんなところもあって、ちょっとコンセプト的には思い悩みながらというところがあります。特にクールジャパン機構が大失敗したのは、売れると思っていたのが全く売れなかったという、そこが基本的な問題だろうと思っています。ある意味では、ソフトパワーはお金にならないけど、でもお金にかかわりなく、あるいは間接的な形でどういうふうなソフトパワーが効くのかを見定めねばならないかなという感じはしております。ただ、これはちゃんとリサーチをしたわけではないので、そ

ういうちょっと疑問があるということで、こうしたソフトパワーが関西で特に集積している可能性という、そのポテンシャルが非常に大きいことはそのとおりだと思いますので、それをどういうふうに生かしていくのかを、もうちょっと戦略的に考えねばならないかなとは思っています。

それから大きな2つ目として、こういうソフトパワー的なものを本当に生かしていくとすると、むしろ関西全体の中で一つ一つの企業さんもそうですし、市町村や地域もそうですし、もちろん大企業や関西経済全体もそうですけどある種の、従来の物とかお金とかに価値を置いていたところから、先ほど加藤先生がちょっとおっしゃった、別の価値みたいなものをシンボリックにでも思想的にでもいいですが、どういうふうに乗っけていくのかが改めて問われるかなと思っています。要するに、関西が持っている基本的なソフトパワーのコアのところ、文化でも歴史でも、あるいは思想でも、あるいはもう少し地域社会的な基盤でも何でもいいですけども、そういうところをもう一度作り直してもいいですし、新たにつくってもいいですし、何かそういうものが出てくるとソフトパワーらしいなという感じがする。要するに、ソフトパワーの中身をどうするかだろうと思っているんですが、そういう点では、例えばヨーロッパ都市が最近やっているような都市のルネッサンスだとか、あるいは文化都市だとかいう視点もこれはこれでありかなと思っています。EUが最近、文化都市戦略で随分力を入れていますが、ひょっとすると共通するところもあるかなとは思いながらお話を聞いていました。

それから大きな3点目は、こういうソフトパワーに注目したときにどうしてもクリエイティブシティ戦略みたいなのがずっと頭に浮かんでくる場所があるんですが、やっぱりああいうクリエイティブクラスみたいな、まあ言ってみれば高収入階層が集まるような仕組みだけを目指していると、やっぱり関西という庶民の力が大きい地域で考えたときに余り合わないなというのが気持ちとしてはあって、さっきのリチャード・フロリダ自身も少し、御自分自身の議論を反省しておられるのかよくわかりませ

んけれども、多少は創造都市戦略がつくり出してきたマイナスの側面みたいなのも考えておられるようです。そういうところも含めて考えたときに、実は最初の議論と同じですけども、せっかくのソフトパワー、そしてそれが持っている価値をどんなふうに使っていくのかをもうちょっと戦略的に考えていくと、むしろ直接産業経済の振興より前に、今回の世界との還流でいうと、どういうふうに関西の持っているソフトパワー的なものに共感してもらえるかというような、そういう戦略が要るのかなと思いつながら聞いてました。さっき大南さんがおっしゃっていたような、一つ一つの文化活動とか地域の丁寧な活動とかが発信されていてそれを行政の力も注ぎながら、それから外の力も入っていきながら、幅広くアピールしていくような世界が、特に人の還流とか交流とかを考えたときに意外と早道かもしれないと思いつながらお話を聞いていたところでした。ソフトパワーはだめというよりは、ソフトパワーの使い方をもうちょっと考えていく必要があるなということで、コメントさせていただきました。

○加藤委員長

ありがとうございました。政府が失敗したこともあって、やや手あかがついてしまったんですけども、考え方としては何か関西らしいアプローチで、表現をもうちょっと変えて、やったらどうかという気もしますし、新川委員が最初におっしゃった、産業としてこれを位置づけてしまうと従来の産業論としてはかなり狭くなってしまって、ファッションとかデザインとかでどう稼ぐかという話になっていってしまう。そうじゃなくて、もちろんこれで稼いでいってもらわんとはいかんのですけども、これをもっと増幅するというんですかね、人が動くような仕組み、仕掛けとして使えないかという気がいたします。

EUの文化都市政策は、あれはなかなかいいですよ。アジアで文化都市政策をするとまたいろいろとややこしいことが起きそうですけども、それこそEUの仲間に入れてもらって、文化首都ぐらいに関西広域連合がなれば世界から注目されるような気がします。創造都市論は事務局と打ち合わせしているときも実は話が出まして、佐々

木先生がいらっしゃいますので、ぜひとも。

本当は佐々木先生が委員長になったらよかったですけども、ぜひとも佐々木先生にこんな視点はどうかという意見も伺ってみたいですね。ぜひとも新川先生の、創造都市論そのものについても教えていただきたい。

今お伺いして、政府の委員もやっているリンダ・グラットンがいろいろと刺激的な出版物を出されて、その中でこれからの若い人の働き方みたいなことを書いてます。人が還流することは、要するに働き方と連動しているので、彼女はその中で、お金ではなくて熱意をもって満足度を高めるということを書いてましたけれども、資料でもあったけどSDGsなんかは世界的にそういう重要な姿になっているわけですけども、そういうものを関西広域連合で打ち出す中でソフトパワー的な、できるようなことがあるかもしれない。ありがとうございました。

上村委員、何かお話しただければと思います。

○上村委員

遅れまして説明のとき聞いていなかったのですが、先生方のお話の中で少し問題がわかってきたような気がします。ソフトパワーですが、関西にはそのポテンシャルというか、そういう歴史的な土壌はとても深いと思います。資料の中で非常に花開いているものを多分、集めていただいたんだと思うんです。先ほど先生方がおっしゃるように、確かに、だからと言ってソフトパワーを産業に結びつけてというようなことがすぐにできるのか、という疑問があります。ソフトパワーは10年後に花開くようなものもあれば、20年、50年、100年後に花開くものもあって、先日のノーベル賞の例でも見られるように、すぐに産業、すぐに役に立たないかもしれないけれども、でもこれはやはり人間が生きていくところでより快適に楽しく、そしてみんなですべていけるかというような素朴な発露ではあるけれども、しかしそういうソフトパワーをやり続けていく中で、見えてくるものの中で花開いてきている。ただ現実、関西においてもこれだけ花開いているということは、やはりそういう土壌があるところに着

目するということで、ソフトパワーを出すことは賛成です。だからと言って来年、再来年、すぐに世界的にこういうものを売り出せるだとか、こういうアーティストをと急がないほうがいいでしょうね。でも、しっかり醸成していく必要があると思います。

私は経営者であると同時に詩人なんです。ポエムの世界で、日本語だけではなくて外国語でも書いておりますので、世界のポエトリー・フェスティバルにも招かれて行っております。マケドニアというバルカン半島の本当に小さい国ですけど、マケドニアなんて毎年、国家予算をとって世界から50人の詩人をあご足つきで招いてくれるんです。それから、有名なのはニカラグアですね。それからコソボという国でもそれをやっていますし、私も行ってまいりました。それからルーマニアとか、東欧の国々、それからオランダのアムステルダムも、世界でも大きな、世界中から詩人を集めて1週間ぐらいのフェスティバルがあります。本当にみんなで詩を詠み合っただけ期間を過ごすんですが、いつも言われるのは、経済大国の日本ではさぞかし大きなポエトリー・フェスティバルがあるだろうからみんな、呼んでくれ、呼んでくれ、といつも言われるんです。でも日本は残念ながら、和歌は天皇家がやっておられて古い伝統があって有名なので、和歌という世界はそういうことをなさっているのもあり、そういうことができるかもしれない。俳句、すごく盛んです。外人も俳句が大好きで、でも外人の俳句は五・七・五のシラブルズ、いわゆる音節で季語無しなのが多いんですね。日本の季語と向こうの季語と季節感が違いますので、季語はあってもなくてもいいですが、それも盛んで、日本でも結構大きな俳句の会はやってらっしゃる。しかしヨーロッパ、欧米はやはりソクラテス・プラトン・アリストテレス等ギリシャ哲学の伝統を受けながら、ホメロスの詩に代表されますが言葉を紡いで、そして単に書くだけではなしに朗詠、吟遊していく。言葉に出して、みんなで詩を吟じていくという伝統の中で、やっぱりすごいソフトパワーがあって、そして詩人が結構、尊敬されているんです。

○加藤委員長

日本でも尊敬されていますよ。

○上村委員

いえいえ、日本ではほとんど尊敬されていないというか、まずその存在価値というか、そういったものを認知しておりません。日本でやろうと思っても。去年は大阪の、少し余談になりますけど大阪の企業さんは、私がお話を何件かしまして、大手の5社が御協賛いただいて、50人も呼べませんでしたけど、世界から7、8人の詩人を招くというポエトリー・フェスティバルに御協賛、御支援もいただきました。どういふふうに詩を理解いただいたかはわからないとしても、上村さんが言うているから応援してあげようと思われただけかどうかは別として、やっぱりそういう土壤があるんだなと感謝しております。ところが京都の企業が意外となくて、京都の企業は応援いただけなかった。これは規模の問題もあるかもしれませんが、だから最初の話に戻るように、ソフトパワーは即、あしたから仕事になるというようなものではない。そういう即ビジネスではなかなか育たないのがソフトパワーであり、でもそういうビジネスにならないことを、関西の中でそういう土壤があったからこそ今、こういった企業に形を変えながら花開いている。学問の世界でもまた然りだと思います。こういう関西の本当に、いわゆるポテンシャルという言葉になるんでしょうか、そういうものは脈々と流れています。例えば京都でも普通のおじさんが能楽をやっていたり、お茶、お花を習い大阪でも文楽の一節を普通の庶民がやっている。そういう中で醸成されていき、形をいろいろ変節させながら育っていくのがソフトパワーだという認識の中で、関西はこれが他の都道府県より、日本の中でも一番、すぐにお金にならないようなことを一生懸命やる人が多かったことは、これは誇ってもいいと思います。それを自覚し、なおかつそれをもっと意識的に、さっき戦略とおっしゃいましたが、昔の天皇家とか為政者とかはそういう、恐らく自分の趣味もあって文化をメセナしてきました。信長でも自分でお抱えの能楽集を呼んで舞を舞わせたみたいな、そういうことが意識的・無意識的にあって育てていったと思います。京都でもいろいろな芸術品や工芸品を天皇家のご用達として、湯水のごとく買いあさっていった、そういう活動が

あっていいのかなと思います。

中国は、いま、すごいんですね。ヨーロッパで行われるポエトリー・フェスティバルをすごく意識して、中国はお金に糸目をつけずやろうとしています。私は今回は行けないですけど、上海で今度あるポエトリー・フェスティバルは1カ月間ぐらい、顎足つきでアート・イン・レジデンス・イン・ポエット、に招きます。詩人は1カ月間の中で幾つか、10か20ぐらいそこに泊まって詩を書いてくださいということです。それを顎足つきでやろうとしております。中国なんかはそういうことを意識的にやっている。絵画などのアートではオークションにかかって何億円とかに化ける可能性がありますけど、詩は一番お金になりにくい又、無縁です。しかし、そういう分野が非常に大事だということを分かっている。中国も非常に漢詩の古くからある詩を重要視する世界ですから、響き合って何かそういう大きな文化活動、ソフトパワーの発揮をやるみたいです。

ということで、ソフトパワー自体には賛成ですけども、どう打ち出していくのかは、少しひねったほうがいいかなと思います。

○加藤委員長

今わかったんですけども、上村さんは経済界のリーダーであるとともに文化というか芸術というか、その先駆的な人でもあるわけですね。

○上村委員

前衛詩人でございます。

○加藤委員長

そうですね。上村さんは、関西と重ね合わせるのが今回の議論かもわかりませんね。お金を稼がんとあかんけれども、だけどお金を稼ぐためにはヒューマンインフラというか、専門分野というか、それが一体化することで人が動いてくると。そこで結果的にビジネスもつくることができるというイメージかもわからないですね。

この我々の小委員会は「人の還流と」がまず頭についておりまして、アジアのハブ

機能がその下についてるんですけども、こちらの人の還流というほうに少しソフトパワーという言葉はウエートを置いているというか、そんなようなイメージかもわかりませんね。その上海の話はすごいですね、関西広域連合が詩人フェスティバル。

○上村委員

詩人を世界からお招きしたいですね。又、関西の良さを見てもらい好きになって頂きたいです。

○加藤委員長

いいですね。

○上村委員

でも、さっきのお話で、大阪の企業はダイキンさんとかダイワハウスさんとか、阪急阪神ホールディングスさんとか、サントリーさんに応援頂きました。詩人の会はお金が何百万も要るわけではないので、規模も小さいし、そんなにたくさん予算が要るわけではありません。共感いただいたことは私、今回本当に感謝しております。当日、企業の方も大勢来ていただきました。

○加藤委員長

関西経済の先駆性ですね。

○上村委員

さすが、なかなか大阪のソフトパワーは捨てたもんじゃないと思いました。

○加藤委員長

もう一つの顔をちらりと大阪を中心に、なぜ京都が出てこないのかという、不満も。

○上村委員

京都はやっぱり文化があり過ぎますので、いろいろなアーティストも大勢です。文化庁もやってきていただく予定です。正統派の文化、カウンターカルチャー含めて本当にたくさんですが、企業も限られている企業ですから、応援もどこへどうしてい

いかわからないような、メニューが多過ぎる。それからもう一つは、京都はやっぱりお目が高過ぎるんですよね。ある程度洗練された本物じゃなかったら、認めません。新しい試みを、いろいろと言ってるけど「何ぼのもんじゃろな」と、なかなか「はったり」が利かないです。でも文化はかなりはったりもあると思いますしね、でもそのはったりが利かない、よく言えば非常にお目が高くて、お目が肥えてらっしゃるという意味でも本物志向だけにむずかしいです。大阪の企業のほうが「やってみなはれ」と一遍乗ってやるかという明るさというか、人のよさがあるのかなと思っています。

○加藤委員長

そういう意味では京都はちょっと異質というか、日本の中でも京都はそういう蓄積がものすごいところでもんね。私の知人も京都に、大阪の大学に勤めているのに京都からなかなか離れないので、なぜこっちに来ないのと言ったら、ともかく京都は最先端のものが常にやってきて、あそこに住み始めたら離れられませんと腹立たしいことを言っていました。貴重なお話、ありがとうございました。いかがでしたか、皆さん。

○新川委員

今の上村委員のお話を聞いていて、ああそうかと思って改めて感心してたんですが、やっぱり新しいこと、しかも評価が定まっていないようなこと、それでもちょっとおもしろそうだなと思ったときに、それをやっていったり受け入れていったりするのは大事だなと改めて思いました。むしろ関西が持っている力ってひょっとしたらそういうところで、それがちょっと芽を出してくるとみんな東京資本に行ってしまうという、そんなイメージが今ちょっと湧いてきたので、そういうところは関西ソフトパワーのリソースみたいなどころがあるかなと思いつつお話を聞いていました。

それと合わせて2つ目に、さっきちょっと加藤先生と大南先生がお話になっていたような、どちらかと言うと若い人たちがどういうところに魅力を感じるのか、どういう生きがい、働きがいを感じるのかというときに、言われてみると確かにお金を稼ぐ

ことに価値を置いている若い人もたくさんいますが、そうでない人も多いかなという感じがしてまして、そのときにおもしろいこと、楽しいこと、やってみたいことを持っている人が結構多いので、上村さんがお話しいただいたような、こんな試みができるような関西は人も魅力的だなと思いながら聞いていました。若い人たちが住むのは難しくても、還流をしながら関西の文化を味わったり、そしてその中で自分自身の新しいインスピレーションを発揮していったり、そしてそれが何がしかの表現活動創造活動につながっていったりというようなことがあると、これはこれで関西の価値を高めるなと思ったところがありました。そういう点では、若い人たちの暮らしを最低限、貧困に陥らないように保障しつつ、しかし好きなことができるようなまちというか、そういう世界を関西がつかれるかどうかは1つ方策としてあるかなとは思いつつお話を聞いておりました。アーティスト・イン・レジデンスなんかは、ある意味ではどうしても一時的な滞在という意味合いのほうが強くなってしまいますけれども、もう少しそれを関西流に持続可能な形にできないかというようなこともやってもいいかなと思って、そういう人の流れをつくり出していくのも戦略的にはあり得るような気がしながらお話を聞いていました。とりあえずコメントだけです。

○加藤委員長

大南さんとか、既にそれを。

○新川委員

やっておられますよね。

○大南副委員長

今の新川委員と上村委員のお話を伺う中で、やっぱりすぐに効果の発揮できる経済と、どんなものになるかわからんけどもという文化の両面を見ていく必要があると思うんです。経済については多分、各府県のあたりがそれぞれいろいろなことをやっていたり、あるいは企業なんかがそれぞれの企業努力でいろいろなことをやっていて、それを関西広域連合で何か取りまとめということは、まず不可能だと思います。唯一

取りまとめられるのがやっぱり文化じゃないかなと思います。だからこれに出てきておる、ソフトパワーに力点を置いてそのあたりから関西広域連合のある意味とか、それが1つの塊になって発信していく方法に力点を置いたほうがやっぱりいいんじゃないかなと思う。極端に言えば、産業とかを余り見ないほうが逆にこの会としてはいいのかなと思います。

8月の下旬から9月の最初にかけて私、アイスランドに呼ばれて行ってきました。何で行ったかという、去年の今頃にアイスランドの人口260人の町から、デンマーク人とベルギー人のカップルがこのアイスランドの町に移住しているらしいんですよ。どうも自分たちはよそ者としてアイスランドの町に入っていると、多少地域の人たちとうまくいかないところがあると。でも神山ではよそ者ともうまくいってるよ。だからちょっと見せてほしいとのことでした。よい機会なので、呼んでくれたら自費でも行くからと伝えてあったら、レクチャーイベントを設定してくれたので行ってきました。地域の人たちも集まりながら2回、会を持ったけども、その中でいろんな話が聞こえてきました。今、アイスランドは観光で注目されています。人口34万人のアイスランドに2017年は年間230万人、だから人口の7倍ぐらいの観光客が押し寄せてきているわけですね。日本に置きかえたら8億5,000万の人が日本の国に来るような感覚ですね。首都圏はちょっとバブルかなと思うような状況で、クレーンがもう何十基も立っているわけですね。結果的に人口の3分の2がレイクキャビン市圏域に一極集中し、どうしてもフィヨルドの町が寂れていく状態で、この町にもせっかく観光の流れが来たのに、20年ほど前に漁業権を民間会社に売り渡していたから観光に漁業が活用できない。後の祭りです。地域の人たちは、あのとき目先のお金に目がくらんで失敗だったなという話でした。また、バイキングの基地でもあった関係から公共工事でバイキング公園をつくったら、これは人が来るだろうと思ってつくったけど全然人が来ない。神山町はICTのインフラが整って今の状況が生まれたと説明すると、年配の男性が、俺たちに必要なのもこのインフラだと話すわけです。

つまり、地域づくりをものづくりと捉えているんですね。部品を組み立てていくと車ができて、それにガソリンを注ぐと車が動き出すという考え方です。正直言って、日本人もアイスランド人も同じように考えるのだと僕は思いました。地域づくりとは多分そういうことではなくて、いろいろな部品に加えて、人という要素が入って、それが原動力になっていろいろなことを動かしていくのが1つの大きな形になると思います。その一方で、この町では3年ほど前からアーティスト・イン・レジデンスを始めて、日本人の建築家の人を最初に入れ、その人から今ちょっと動きが始まってきて、地域住民がもう一回、自分たちの地域を見直そうということで、何かほのぼのとした1つの発火点みたいなものが見え始めているので、ここはもしかしたらこれから10年、20年のうちにいろいろな形でおもしろい形が起こってくるのかなという気がしました。アートに限らず、先ほど上村委員から詩とかいろいろな話が出ましたけども、いろいろなことの可能性があると思うんですね。それらが結果的に関西のいろいろな場所に特色を持って散らばってたら、非常に魅力的な関西ができるかなと思います。

多分これからは、よく言われるようにI o T、A I、ロボットみたいになってくると思います。それらは少し冷たい感じのものですよね。これらに暖かな人間味を吹き込むのがアートであったり、先ほどの詩であったり、いろいろな文化だと思います。そのような文化の背景を持っていたら、結果的に西洋とは違うようなA Iとかロボットとかが日本で生まれると思うんですね。そういうようなところでその基盤をつくるために、今は効果は目に見えないけど、でも20年後、30年後はもしかしたらというようにところに、そんなに多額の投資じゃないわけだからきちっとお金を入れて、育てていた分が結果的に関西の将来もつくっていくかなと、僕はそんな気がしました。

○加藤委員長

なるほど。まさしく地域の個性を生かしながら、これは関西広域という大きな枠ではなくて、多分その地域、地域で個性があるはずだけれども、そこの文化なり固有の資産なりをベースにしたI o TであったりA Iであったりと。それこそが、風呂敷

をちょっと大きくすると世界と競争する最も重要な要素かも知れないですね。この両面を持っていることが、そこでしかないということですよ。関西全体にそれを仲よく、どんと全部つくっていくのはどうですか。大阪府のどこかは上村さんを引っ張り込んで、一生に一度の。なかなかよい提案、お金もね。

○上村委員

そんなにかかりませんね。

○新川委員

アーティスト・イン・レジデンス自体がそんなお金のかかる話ではないので、地域の御協力があれば、特にこれからという人たちにたくさん来ていただいてというのは大いに可能性がありますし、むしろソフトパワー戦略としても関西みんなで一斉にやりませんかという関西広域連合の提案や、それに呼応する府縣市町村がたくさん出てくる、そんな図式が一番いいかもしれませんけど。

○加藤委員長

大南委員がおっしゃったように、私は広域産業計画のお手伝いをしているんですけども、これはなかなか、府県が一致するのは水面下ではなかなか大変で、しかし最終的には稼いでもらわんと困るわけです。もっと中長期的な観点からこの関西の計画のベースをつくっていくことをここで皆さんと同意して、しかも広域と地域、地区がきちっと連動・連鎖している構図をもしここでつくることができれば、構成している府県市の皆さんも賛同していただけるのではないかと思います。方向として、これはなかなかいいですね。上村さんのお話から出発して。

○上村委員

特に大阪のおもしろいことをやってみようかというような若い方が頼もしいです。もちろん企業のスポンサーとなると、後々で報告書だとか、株主に対する説明も必要ですが、ポエトリーフェスティバルは金額的にそれほどのものではない割に効果がある。今言ったようにマケドニアだとか、ルーマニアだとか、アルメニアだとか、本当

に小さな国ですけど、そういうところでも万博投票のとき1票を持っています。国連の中でも1票です。そういう途上国ほど詩が盛んです。南アメリカの国だとか、まだ政権がはっきりしないとか、まだまだ貧しい国には、やはりポエムが国民に生きています。もうある程度満足の多い国は余りポエムを必要としませんが、今はまだ困っていることが多い途上国になればなるほど詩の持っている力が大きくて、そしてカリスマ的な詩人もたくさんいます。

まず神山という名前がいいですね。ネームの持つ力がすごくあると思うんですね。何か心をひかれるものがありますよね。人口は5,300人、ちょうどいいじゃないですか、ここは村ですか。

○大南副委員長

町になります。

○上村委員

町ですか。町の中でもそういう御要望があればと思います。ぜひどこか、関西広域連合の中でそういった催しに御興味のあるところがあったら、ご一緒にいかがでしょう。やはり世界は言葉ありきですね。学問の世界でもそうですけど、やはり言葉ありきで、そういうものをずっと大切にすることが重要です。日本の場合には詩人でも言葉に凝る人が多いですけども、むしろ外国の場合は生きざま、詩人は生きざま、ずっと一つの言葉に固執しながら、世界と時代を切り結びながら生きている。常に世界と関わりながら考えを発信していくような、生きざまそのものが詩人となっているような人たちがたくさんおられるので、恐らく日々、何かインスピレーションみたいなものが響き合う。響き合うことによってまた次なるアクションとか考えとか、そういうインスピレーションとインスピレーションの相乗効果みたいなものを産んでいけるといいなと思います。

それから、関西はお稽古事が結構盛んですよね、他府県に比べて。カルチャーセンターとかそういうものの動きはないですけど、ソフトパワーというときにぜひ、こう

いった中で、ざっとした資料で結構なのでカルチャーセンター及び塾、塾って学習塾じゃなくていわゆるカルチャー、お稽古事が、他都道県に比べて非常に盛んだと思います。それもソフトパワー、何でも入門、習っていく中でずっとやり続けていく人が関西の、人材としてのポテンシャルだと思いますので、お稽古事をちょっと、ソフトパワーの中で注目したいです。お稽古事ビジネスもありますしね、お家元ビジネスとか。やっぱり関西の文化は、特に京都は、お家元中心です。お家元を中心とするピラミッドのパワーがあって、それがまた非常に世界とつながっておられますよね。それが洗練された形です。家元文化には少し注目していいと思いますし、それから教会は教会で、神社会は神社会で、世界とつながる宗教界の世界会議をやっておられるところもありますし、他都道県、他地域にない関西ならではの、一種の宗教というふうなものが大本山、本社ですね。京都本社、大阪本社の、宗教もソフトパワーとして存在感があります。それもどういう言い方をするかは別として、押さえておくソフトパワーかなと思います。

○加藤委員長

そうですね。ライフスタイルを前面に出すのもちょっと変かもわかりませんが、関西のこれまでの歴史的な、文化的な蓄積とうまくつなぎ合わせることができると、その地域の強みになるかなという感じがいたしました。

この1番のところは、今の皆さんからの議論を事務局で整理いただくといいと思うんですけども、資料として準備いただいているのが資料2-1、JICAとの連携、これはSDGsであったり、あるいはその次のページは構成府県が海外事務所を随分たくさん持っておられて、こういうところとうまく連動・連携できないかと。これ、実は次の、関西をどう海外に売り出すかという2番目の項目とかかかわっているかもわからないですけども、関西をどう海外に売り出すかという資料は別にいただいているんですかね。そうしたら、ちょっとここに入りながら続きをやっていきたい。

○日裏計画課長

あと、資料として用意させていただいておりますのが資料5でございます。これは以前にも一度出させていただいたもので、これまでの、第1期から第3期までのそれぞれの分野での取り組みという資料を出させていただきました。そのうちの産業分野についてと観光・文化分野についての取り組みを取り出したものでございまして、先生方には一度ごらんいただいておりますが、簡単に御説明いたしますと、まず1ページ目は産業振興についての取り組みでございまして、この中で(2)では中小企業との国際競争力の強化についての今までの取り組みを記載しております。それから2ページ目の(3)では、海外に向けた関西ブランドの確立についての取り組みを記載してございます。それから2ページ目の後段は観光振興についての取り組みでありまして、3ページの(2)ではその海外向けプロモーションの展開についての取り組み、それから3番では外国人観光客の受け入れ拡大に係る基盤整備などについて記載しております。それから4ページは文化振興についてのこれまでの取り組みでございまして、それから5ページの3、関西観光本部の取り組みは今回初めてつけさせていただいたものですが、日本版DMOとしまして関西の広域観光に取り組むために官民連携で関西観光本部を昨年度、設置いたしました。そこでの取り組み内容について簡単に御紹介させていただいているのが、5ページから6ページにかけてでございます。それから7ページは、今どのような形で海外向けに広域連合として情報発信をしているのかについて御紹介させていただいているものでございまして、外国人向けのホームページでの情報発信が、1番から7番までのこういうものを今立ち上げておりまして、めくっていただきますと、それぞれのホームページのトップページがどういうものかをずっとつけさせていただいております。3つです。最初の関西ツーリズムについては英語版を8ページ、9ページにつけさせてもらってまして、それから「関西祭. com」について韓国語版で10ページ、11ページ、12ページについては関西の日本遺産というホームページで、これは中国語版をサンプルでつけてございます。用意させていただいた資料は以上でございます。

それから、先ほどのお話の中で出てまいりましたアーティスト・イン・レジデンスですけれども、実は広域文化の取り組みの中で実際に取り組みを行っております。こちらにつけさせていただいた資料には個別の事業の内容について記載がございませんので、申しわけございません、隠れてしまっているんですけども、取り組み内容としましては、アーティスト・レジデンスをテーマとした国際シンポジウムを鳥取県、滋賀県、徳島県で開催し、参加外国人アーティストが各地域の魅力を語ったり、先進地事例を共有するなどして、文化芸術の場としての関西の魅力の発信、関西全体の文化芸術の向上につなげたというふうな取り組みを26年度から29年度にかけて実施しております。ただ、先生方からこういうことをさらに進めていくことがいいのではないかという御意見をいただいていることにつきましては、文化の事務局に伝えさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○加藤委員長

ありがとうございました。1番で中長期的な観点から関西の文化的な、あるいはアーティストックな魅力をどう展開していくのかという議論をしていただいたんですけども、2番のところで突然売り出すかという話になってきて、そういう関西からの情報発信をどうしていくのかという項目から、そういう意味で府県市が持ってらっしゃる海外事務所との連携が大事だろうなという。これ、ちょっと事前に拝見していただいて、こんなにたくさんあるんだったらこういう資源をうまく使いこなすことで関西の魅力発信は可能ではないか。大阪府さんは大阪府さんで、京都府は京都府さんで、兵庫県は兵庫県でということで多分、それぞれ個別にやっておられると思うので、そのあたりをうまく連携できないかなと、ふと思いました。

それと、どう売り出すかは我々、経済をやっていますと営業がまず最も重要で、非常になじみのある表現ですけれども、今の広域計画全体の皆さんの議論から言うと、どう売り出すかはちょっと、余りにも限定されたイメージがつきまってしまうので、何かもうちょっといい表現はないかなという気はするんですけども、これも随分議

論が蓄積している、ソーシャル・キャピタルという言葉がありますよね。経済学では、ソーシャル・キャピタルとは社会資本で、道路とか橋とかですけれども、ここ10年、20年、ソーシャル・キャピタルは関係性資本といって、ここで言うと地域と地域の信頼関係とか、つながりとかいうような読みかえもできると思うんです。アジアが前面に出るとしたら、関西とアジアの信頼関係をどうつくるかとか、ちょっと青くさい表現になるかもわかりませんが、結局その信頼関係が生まれることでそこに投資が行われるという構図で、実はソーシャル・キャピタルという言葉を経済学者が注目し始めたのは今から20年以上前ですけども、そのときにソーシャル・キャピタルの分厚いといいますかね、当時は地域内の安全というようなところにつながっていたんですけども、他地域との信頼度の高いところには地域外からの投資が多い、もう明らかに相関があるという分析が行われて、そこから、ああそうかというのでいろいろな視点から分析が始まっていったわけですけども、そういう意味では、ダイレクトに売り出すよりはアジアとの信頼関係を関西は持っているよと。国との関係でいうとなかなかぎくしゃくして難しいこともある対アジアですけども、地域であれば、そういうことはちょっと横に置いておいて、本来の意味でのソフトパワーでのやりとりにも入っていけるのではないかという気もするんです。このあたり皆さんから御意見をいただければと思うんですが、いかがでしょうか。

○上村委員

今のお話を聞きながら思い浮かんだのが、県をまたいで一緒にやってらっしゃる瀬戸内国際芸術祭は四国の香川（高松）、愛媛、広島と岡山です。御一緒に、県をまたいで瀬戸内国際芸術祭、4年に1回か3年に1回ですが今や、非常に世界的にも有名になって、直島というところに美術館とか、ベネッセが建てたホテルとかがあるんですけど、世界の芸術家で知らない人はいないぐらいの有名な島です。この間もフランス語しかしゃべれないのに自分たちだけで直島まで行くというので、これは大丈夫かな、途中でフェリーも乗らなくちゃいけないのに行けるかなと思うぐらい心配し

たんですけど、ちゃんと行って帰ってこられました。でも、それでも外国のアーティストなんかは日本に来たからには直島と言います。直島は遠いですよと言っても直島、直島と言うんですけど、私は瀬戸内国際芸術祭がそういうソーシャル・キャピタルをうまく使い協力して、やってらっしゃるのか実態は知らないですけど。常設展示もあり、そして本当に世界から注目されています。ああいうふうに関西でやるとしたらもっとできるだろうし、今、県をまたぐような芸術祭ってあるんですかね、関西広域連合全体でやるような、文化のソフトパワーを結集するようなお祭りは。

○村上事務局長

行政が関わっている形では、ないと思いますね。

○上村委員

たしか瀬戸内国際芸術祭は県をまたがって。

○新川委員

多分、香川県と岡山県の間でやっておられる。岡山の企業さんが香川県でやっている。

○上村委員

そうですね。どんなジャンルを選んで、どういうテーマでやるかは別としまして、最初からあまり大きな、網羅するようなことを考えると大層なのであれば、一定のジャンルを選びながらというの。この直島にあるのも含めて、直島はモネとか安藤忠雄さんとか有名な方の作品もありますけど、手島なんかはもう全く前衛芸術家の方ばかりですね。逆にやりやすいんだらうと思うのは、関西だったらやはり日展の、この先生のか、何とか派とか、芸術の世界も伝統がありますから難しいですけど、そういうのからフリーで、そういう蓄積がそんなに厚くないだけに非常にフリーハンドです。イサム・ノグチとか流政之とか、ああいう前衛の人たちの作品もたくさんある。むしろ前衛を表に出している。そういうものに、非常に興味を呼ぶ世界は、興味を持つ人を呼ぶためには少し参考としてみてはどうかと思います。

○加藤委員長

そういう意味では既に、関西ではないけども瀬戸内で生み出されているというか、そういう人たちが集まり始めているということですかね。

○大南副委員長

私自身もアーティスト・イン・レジデンスをやる中で、2000年初頭ぐらいに結構直島へ行ってきました。直島から、フェリーに乗って島を離れるたびに直島を見ながら、これから資産1,400億円を持つ福武総一郎さんもない、安藤忠雄さんの美術館もない、瀬戸内海もない山の中に帰るんやなと思いながらいつも見つめていました。結局、結構な資本が投入されて、それまで直島は三菱の製錬所があって、そのあたりの歴史があって直島という発火点が生まれて、そこに行政がお金を入れて広げていったということで、これってなかなかよそではまねができないというか、発火点をつくるまでにかなりの時間がかかると思うんですよね。逆に言ったら、僕らが神山で目指したのは、直島と全く真逆な形でプログラムを立てていこうと、お金を余りかけずに、施設もない、だから最初からアーティストを集めるときに、もし多額の支援が必要な人は神山のプログラムに応募しないでくださいとネットに書きました。ホワイトキューブのすごいアトリエは神山町にはありませんと。アトリエは40年以上も前につくられた保育所です。素晴らしい施設が必要だったら最初から応募しないでくださいと。でも、地域の人と一緒に作品をつくって、交流するような人間本位のプログラムを探しているのであれば神山こそあなたの場ですというやり方でやりました。だから先行事例とか成功事例とかを最初からイメージしながら追いかけるのも結構よくないんじゃないかなと思って、逆に神山の成功事例があったら、神山の真似をするのではなくて、地域、地域の独自性があるので、違う人が住んでいるからその人たちに合ったようなものをつくり上げていく必要があると思います。それで、神山のアーティスト・イン・レジデンスがどれくらいの資金でやっているのかをお話します。基本的に毎年3名のアーティストを招待しています。日本人1名と外国人2名。

外国人2名に対しては、1人当たり約70万円です。往復旅費と生活費、それから材料費を支給して、全体では二百何十万円ぐらいで回しているプログラムです。

一方で、前回のここの会議で少しお話ししましたが、神山進化論の6章にも「農業の未来をつくるフード・ハブ・プロジェクト」という章があります。これは2014年「食を通じて新しい文化が生まれるような場を神山につくりたい」と東京から移住してきた真鍋太一が始めた事業です。地産地食をコンセプトに、「地域で採れたものを地域の人たちが食べて支えて、その地域の農業を未来につないでいこう」というもので、前回にも御紹介しましたが、ことしの1月から「シェフ・イン・レジデンス」というプログラムをやっています。それは世界中のシェフを神山に呼んで、ある人は1カ月、ある人は3カ月以上、6カ月ぐらい滞在するシェフもいます。そうしたシェフたちが自分の料理を振る舞ったりするわけですね。では、シェフに来てもらうためにフード・ハブ側が何を提供するかと言えば、賄いの御飯と宿舎だけです。それでも世界中のシェフがやって来ます。さらにもう少し居させてと滞在延長を希望するシェフがほとんどです。ニューヨークのシェフが考えた新米のおにぎりを食べるイベントを、1人2,000円ぐらいの会費でやっていましたが、県内外から数十名が参加していました。こういう事業がなぜ成立するのでしょうか。たぶん欧米のシェフの人たちも日本料理に出会いたい、あるいは日本の食材に出会いたいのだと思います。しかし、そうした比較的安価で、長期間滞在できるような場の情報が無いので、神山などにその場を求めてやってくるということだと思います。ということは、逆にこのアーティスト・イン・レジデンス、シェフ・イン・レジデンスの、最初の言葉、アーティストやシェフという言葉他に読みかえることによって、例えば、クリエイター・イン・レジデンスのようなものを生み出していければ多様性に富む地域が生まれると思います。こうして読み替えたプログラムを広域連合の各府県の中で、展開していくのも一つの方法かなと思います。

ちなみに神山のフード・ハブ・プロジェクトは京都府与謝野町に入り、神山にやっ

てきたシェフも連れて行って、京丹後の特色ある農産物や海産物に出会う中で、新たな料理が生まれると言ったことが圏域を越えて起こっているんですよね。広域連合事務局の方は予算を心配されると思うけれども、お金がなくてもできることってたくさんあります。こうしてシェフの人たちが今度、訪れた地域の情報を自分の国へ持ち帰って「こういう場所だった」というで情報がだんだん広がっていきます。

だから、上のほうから広報をしなくても一番根っこのところからずっと名前が伝わって行って「こんなおもしろい場所があるよ」というところで広がっていく可能性があるかなという気がしますね。

○上村委員

俳句・イン・レジデンスもできますね。

○大南副委員長

絶対そうだと思います。大阪で。

○上村委員

神山中。あいているときに。

○加藤委員長

ポエムの町ができると格調高いですね。競争になるかもしれませんね。取り合いになるかもわかりません。

○上村委員

そうですか。それぐらいならまだいいけれど。

○加藤委員長

大南さんのところへ伺ったけれども、一番びっくりしたのは「インセンティブを提供するから来てください」ではなくて、「うちはこの人に来てほしいと思っている」と。要するに選択する側になっていることですね。でも、ちゃんと来る。あのとき僕も質問したかったのは日本全体でも、あるいは今回はシェフの皆さんの世界ですよ。どうやってその情報を皆さんに持っていく、ニューヨークのシェフがなぜ大南

さんのところを知っているのかが不思議ですけども。

○大南副委員長

基本、アートの世界であれば結構、やってきたアーティストたちがアートのコミュニティに神山町を伝えるのが結構多いですね。神山町にあるビストロなんかでも、外国人ではアムステルダムから来たお客さんが一番多い感じですか。そこに流れ込んで行って、結果的にアムステルダムのアートのコミュニティからヨーロッパのベルリンとかロンドンとか、アート関係の人を通じて神山の名前が知られていくみたいな感じですよ。

○加藤委員長

何か特定のツールを使って情報を流しているというよりは、ある意味では口コミとか、経験した人が伝えていくとか、そういう感じですか。

○大南副委員長

そうですね。口コミと、それからウェブサイトを持っていますよね。総務省のモデル事業でいただいたお金でつくった、2008年につくりました。このときとにかく僕らが気をつけたのは、ありのまま、あるがままの情報を出そうとしました。何が起こるのかというと、デザイナーの人たちは特に自分の力を発揮したいから、「どうだ」というようなサイトをつくるわけですよ。だから飾られた、装飾された情報が結構出て行って。その結果、来た人がウェブで見たものと現実に見たものが違えば、ここに乖離が生まれれば、その分その地域は価値を落としてるのだと思いますよ。これをやらないためにはとにかくありのまま、あるがままで一番底辺のところ、そのままの情報を出しておいて、今度来た人に見せてもらおうというのが大事で。来た人が「すごいところだった」と、「何もないと思ったけど、すごいところだった」ということになれば、この地域の価値が上がっていくということだと思うんですよ。

よくいろいろな場所でやられるのが、有名ブロガーを呼んで、招待して、自分の町のことを書いてもらおうと思って。あれは必ずお金のやりとりがあります。有名ブロ

ガーの人がやって来たら、当然自分が余りよくないなと思ったところは隠してしまうわけですね。いいところばかり出していくから、結果的にそこで本当に入ってきた人が乖離を感じて、本当は価値を落としていっていると僕は思います。自分たちのありようとか、物事に対する向き合い方とか哲学とかを、できるだけそのままダイレクトにぶつけていったら、それを必ず受けとめてくれる人たちがいるので、その人たちが自分たちのターゲットだと思うんですよね。そうすれば割と、「何か特にやってないけれどな」みたいな状態で情報は伝わるような気がしますね。

○加藤委員長

観光ツーリズムの本質ですね。マーケティングの本質かもわからないけれども。関西のそれぞれの地域が今、大南さんがおっしゃったような何かこうウェブをつくるのに、そんなにお金はかかりませんしね。視点で自分たちを打ち出していくことで、結果的にこの関西を海外に売り出すといたしますか、つながっていくと。ですからうそを書かないというか、大げさにしないのはまさしくソーシャル・キャピタルの根本原則かもわかりません。

○上村委員

今、神山のお話を聞きながら本当に、結構このごろの若いアーティストで、まち中のざわざわしたところではなく、引っ越して、その中からまたこういう神山までしっかり組織立ってはいないけれども、自分たちの移り住んだ町をこういうふうにしたと思う、神山のようにもう少し組織的に持っていきたいというような若い人がたくさん増えてますし、価値観が本当に変わってきているなと思います。いろいろな価値観があるかもしれませんが、あまり物を欲しがらないし、住むところにもこだわらないですし、ちょっとこう若い人たちを中心に幸せのあり方みたいなものが変わってきている中で、非常にこういう考え方が広がってきていると思います。

もう一つ、ヨーロッパで招かれたところで、「これが本当に関西にあったらな」と思うのは、ヨーロッパの大富豪のお家に、大きいんです。招かれて、そこに5人とか

10人とか、ポエムだけではなく絵を描く人とか、物を彫刻する人とか、いろいろな何人かアーティストを集めて、何もしないです。単にみなレジデンスみたいなもので大きなヴィラみたいな、個人の所有ですけれども、そういうところで「皆で好きなように過ごして食べて歓談してください」みたいな、そういうハウスがあって、私も一度だけイタリアのジェノバ郊外のヴィラというのかな、お城みたいなところに行っただけです。日本もITや何かでね、分野やベンチャーで企業して非常に稼ぐ人もふえてきたので、個人がそういう芸術家のような人をたまには呼んで、何かそういうメセナ文化といいますか、企業メセナでもいいですけど、個人メセナでもいいですけど、芸術家のパトロンがエエカッコになるようなことがあっても良い。多分、関西の歴史の中ではそういう、昔は大富豪、大阪にもたくさん大富豪がおられたでしょうから、京都にもあったり神戸にもあったりして、そういうメセナ、旦那さんの文化で、芸術家を応援していく歴史はあったはずなので、現代版風メセナもスタイルとして、定着したいですね。何かあそこもやっている、あそこもやっているとなると、やっぱりそういうのも少し次世代は格好いいお金のある人たちのライフスタイルというふうになると、いいソフトパワーが醸成される空気になるかなと思います。

もう一つは、今度はお話が変わってIRですね。万博はまだ時間待ちですけども。もう決まるとは思いますが。IRはほぼ法案どおり、いよいよ関西にも、近いと思います。IRはインテグレット・リゾートですから、カジノの上がりでもっていかにはほかのMEICEとかの人が集まる、そういうところがどういうふうに活性化するか、新しいまちづくりをこれから、一からやっていけるわけですから、ぜひ関西のソフトパワーを結集するような形で飾りたいですね。これもカジノの上がりやを何に使うかですから、どんな施設をどんなふうにつくって、どんなコンセプトで花開かせていくのかが、これからかもしれません。ぜひIR、恐らく夢洲が候補に挙がっていると思いますので、夢洲で一つの、IRへの批判は多いですけど、IRを核としながらこんないいことが花開いたとなれるといいと思います。

○加藤委員長

上村さん、2番のところをうまくまとめてもらったけど、そういうアーティストも含めて若者、あと特定のことに非常に関心のある人たちが還流していく仕掛けをどうつくるか。これは大南さんがいろいろと示唆的に、御経験を披露してくださった。

もう一つが現代版メセナで、上村さんがおっしゃいましたけれども、そういう同時にそういうことも十分、これは企業の皆さんとの連携みたいな、というようなこともあろうかと思えます。

I Rについては非常に重要で何か、上村さんがおっしゃったように首長の皆さんもそれぞれ温度差はありますけれども、これは展開することが一つの方針になっているので、どういう書きぶりにされるかは事務局にお任せしますけれども、上村さんが御指摘になったので、ぜひともこれを位置づけて書いていただいたらいいんじゃないかなという気がしますけれどね。

○新川委員

いろいろと皆さん方の話から刺激を受けて、一つは暮らし方とか生活文化みたいなところ、あるいは生活経済的な側面というんでしょうか、そういう日々の暮らしが持っている、そうやってしまうと実は一つに聞こえますが、本当に360度、いろいろなものが生活文化の中にあるはずですが、そののところをもっと丁寧に見ていかないとソフトパワーにならないなと思いながらお話を聞いていました。

神山町、あるいはそういう農村的なところのお話も出ましたけれども、もう一方では関西圏の大都市、それも歴史のある都市があります。都市の文化や都市の経済の中にも文化があって、それこそ本当にそれを魅力的だと感じてそこを生かそうという、そういう人たちもたくさんいらっしゃいます。京都でいうと、やはり町屋をアートの表現の場にする。そういう人たちもいらっしゃいますし、単に町屋だけではなくて、それがあ町空間とか路地とか、そういうところを表現の場と考えている人たちもいらっしゃいます。

あるいは地域の伝統的な集まり、つながり、それをむしろ自分たちの表現とつなぎ合わせるような人たち、そしてその活動に、それこそお祭りにかかわっていくような外国人の人たちもたくさんいらっしゃる。というようなことを考えてみると、実は種が山ほど転がっているのに全部無駄にしているなという、そういうところがとても気にかかりました。

本当はそういうところを、身近な市町村がよくわかっておられるはずですが、意外にそういう宝物に気がついていないのが実際であって、それが今日、こういう場面でお話をさせていただいていると、「ああ、あれもある、これもある」と、そういう状況がたくさんあるんじゃないかなと思いながら聞いていました。

広域的に、俯瞰的に見るのは、ひょっとするとそういう鳥の目ですが、同時に地域の中に入ると虫になれない人たちの、虫も一緒に見てしまうというような、そんなところの必要もあるのではないかと思いながら聞いていました。

そのときに大事なものは、単に「鳥の目であれもある、これもある、さあ頑張れ」と言って声をかけるのではなくて、本当に人の還流とか発信とかを考えていくとすると、その虫同士で交流・交換ができるようにしていただかないとこれがつながらない。これは大南さんがおっしゃったとおりで、ある意味では共感を持ってもらえる人の間でなければ成り立たないような、そういうつながりとかが実は経済の活動でも芸術の活動でもその背景に必ずあるはずです。そういうところをどうやって結び合わせるか。そのときにそれは、巨大な広告媒体をつかって何とかという話よりは、むしろそれぞれが持っている価値を、それぞれの価値に共感できるような人たちとの間で共有できるような、そういうやり方がありますよね、ということ伝えるほうが大事かもしれないと思いながら聞いていました。

そういう意味でのPRの仕方とかは、ちょっとこう考え方を変えて、むしろ関西圏としての還流の手法みたいなのをもうちょっと洗練させていく必要があるのではないかなと思いました。

そしてそのことが実は関西圏にある資源、それはお金持ちの資源もありますし我々庶民の、日常の暮らしの中の資源もあります。それが上手に生きていくような、そういう世界につながっていくことが大切なような気がしながら今、お話を聞いていました。

まず、それがどれぐらい産業振興に、次につながっていくのかは、まだ確たるところはなすけれども、産業振興もきっと同じで、大企業さんにしろ、中小企業さんにしろ、ともかく市場をきちんと開拓していかないと次はないはずで、それをやっていこうとするときに、従来どおり、これまでと同じ製品を同じように売り込もうとしてもそれは限界が来ています。、そうすると次のビジネスモデルをどういうふうにつくっていくのかというときに、巨大な市場に向けて「何か言ってください」といってもそれは出てこないはずなので、むしろどういうお客さんとどんなふうに新しい商売、あるいは新しい製品、新しい技術をつくっていくのかをむしろ丁寧に考えていく必要があります。あるいは、それにお金を出そうという人と上手につながっていくような、そういう仕組みや運動は必要です。

そういうマッチングができていかないと産業振興も次につながらないですし、それこそ外からの投資も、関西へ呼び込むことにならない。あるいは関西の中小企業に外国へ出ていってもらうときに、ただ単に「みんな頑張れ」といっても、あるいはそれぞれの受け入れ機関を紹介し出すと言うだけでは恐らく、ほとんど何も進まないだろうと考えています。

要するに相手方と、きちんと目的や、あるいは考え方や、そして最終的には利益を共有できるかどうかポイントになるはずで、そういうところを見定めたいものやっぱり関西で確立していくのが必要ですね。そういう方向で企業支援、あるいは海外の投資家、あるいは海外企業の関西への呼び込みを考えていかないと、そううまくはいかないなと思っていて、5年かけてもううまくいかないだろうとちょっと感じましたのでそこだけ申し上げておきたいと思います。以上です。

○加藤委員長

最後になって、うまく新川委員にまとめていただきましたので。きょうの議論、恐縮ですけども事務局でまた再整理いただいて、ちょっと文言の修正、項目の修正、解説等もしていただければと思いますけれども。

新川委員がおっしゃった、おのおの価値の共有の場というんですかね、これをどうつくっていいのかみたいなの。関西全体のそういう共有された価値の場もあるし、もっと小さな、今の大南委員なんかのお話あるいは上村委員からのお話なんかは、もうちょっと小さなものかもわからないです。そういう特定の場を超えた何かこう、その場ということもあるのかもわからないですけども。ちょっと、整理するのはなかなか難しそうですが、ぜひとも、ちょっとここで新しい意見を事務局から整理していただけるとありがたいなと思っています。

何か言い残された方、上村委員、どうですか。

○上村委員

やはり、ソフトパワーとは人づくりでもあると思うんですね。今、世の中自体が新しい、第4次産業革命のツールによって、もう一度構築していかなくちゃいけない時代の中にあります。その中で部分最適ではなく全体最適の人間をつくっていかないといけない、それには人間力がトータルに要ると思うんですね。いわゆる教養主義というか、リベラルアーツです。何かそういう一つのカルチャーをしっかりと踏まえつつ専門性があるような、そういう人材を育てていかなくちゃいけないときに、やっぱりこの文化の持つ力は非常に大きいし、それが子供のころから、また学校関係、地域でそういうものにふれる機会が多いこの関西。そういう若い人たちが、若くなくてもいいですけど、次なるビジネスモデルを構築していいのか。AIとどんなふうに共存していく、ITを使いこなすというときに人間力が要ると思うんですね。その外国で考えたものを輸入して、入ってきて「こう使いなさい」というだけではなく、やっぱり日本的な使いこなしをしながら日本発のそういう道具、新しい道具をつくりな

がら、産業全体を再構築していく中で文化の力、ソフトの力を生かす。そしてそれが次なる、次世代の人材育成にもつながることではないかなと思いました。

○加藤委員長

ありがとうございます。大南委員、どうですか。

○大南副委員長

今、上村委員からも話があったように、今のITの世界においてもプラットフォーム的なものは全てアメリカ製ですよね。フェイスブックにしたってグーグルにしたって、アップルにしたって。

結局、今までの日本は、ハードパワーでは非常に進んでいたのにそれを生かすソフトパワーがなかったということに尽きるのかなと思いました。だから今度は逆に、ソフトで勝負できるような日本であったり、あるいはこの関西圏域であったりという必要がこれからあるのかなと。

そのためには、それを育てていくようなベースになる文化とかいろいろなものをきちっと育てて、そのあたりにふれられる機会をつくったことによって、結果的にその上にソフトパワーが構築されるみたいな考え方で進んだらいいかなと思いました。

○加藤委員長

ありがとうございました。きょう、この議論は一体どういう方向に行くのか心配していたんですけども、非常におもしろいといえますか、重要な御示唆をいっぱいいただきまして、この全体、再度ブラッシュアップして、次回に向けてまた整理させていただこうと思っています。

きょうは貴重な御意見をいっぱいいただきまして、本当にありがとうございました。事務局の方、大変ですけどまたよろしくお願いします。